

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 日向 一雅

本論文は、『源氏物語』の世界形成の方法と物語の構造とを、主として準拠と話型という視点から分析したものである。日向氏の問題意識や物語分析の方法論は、序章「源氏物語研究の方法と本書の概要」において鮮明に打ち出されている。まず準拠論において日向氏は、本居宣長が物語世界を「もののあはれ」というあまりにも単一な主題に収斂させて準拠説なども軽視したために、王権と政治の主題や諷諫性など、物語世界の多面的な構造や意味を見失って物語の読みを平板化してしまったとし、中世源氏学における準拠論を再評価して、これを方法論的に精練している。また、話型論における日向氏の論のすぐれた特徴は、貴種流離譚や継子いじめ譚といった話型を固定的に物語世界に押し当てるのではなく、物語世界の生成発展にともなって反復され変奏される話型を、あくまでも物語に内在して柔軟に捉え、その構造論的意味を問おうとする点にある。

本論はIV部に分けられた20章から成る。まず第I部「王権と家の物語の構造」は、主として準拠論的分析を通して『源氏物語』が王権、政治、「家」といった主題に関わる平安朝の歴史的現実をいかに物語内に取り込んでその世界を形成しているかを解明しつつ、物語の儒教的な理想主義をも浮き彫りにしている。第II部・第III部は、主として話型論による物語の構造分析で、第II部「宿世の物語の構造」は、光源氏とその父桐壺院、柏木とその父太政大臣、薫とその父柏木と、いずれも父と子の間で反復されるモチーフがあることを析出し、それを「宿世」＝「生き方の系図」として捉えつつ、話型論的分析をほどこす。また第III部「女君の流離の物語の構造」は、まず帚木巻の雨夜の品定に女の生き方に関する教誡と問いかけが込められていることを明らかにし、その問いかけに応ずるようなかたちで女君たちの苦悩と流離の物語が以下に展開してゆくことを論じている。

また第IV部「平安文学諸論」は、準拠論・話型論の分析方法を、『伊勢物語』や『大和物語』、『枕草子』等の『源氏物語』周辺作品にも押し及ぼして、本論の補足としたものである。

以上のように本論文は、一貫した問題意識と方法論をもって緊密に構成されており、丹念で精緻な表現分析を通して、物語の有機的な構造に関する数多くの新見を提示している。また本論文は、各主題ごとに膨大な源氏研究史を手際よく整理しつつ日向氏自身の問題設定を鮮明にしている点、近年の王権論や記号学的テキスト論にも目配りを行き届かせながら、あくまでも本文の丹念な読み に即して、それらの論に対して批判的な距離を堅持している点においても、氏の誠実な学術的姿勢が評価される。もっとも、第I部では若干準拠に引き寄せすぎているように思われる箇所がないではなく、また第III部では、流離譚という話型の柔軟な適用が、かえって話型としての輪郭を曖昧にさせてしまった憾みをなしとしないのであるが、しかしながらもとよりそれは本論文の全体としての価値を損なうものではない。よって、審査委員会は本論文が博士(文学)の学位に値するとの結論に達した。